2016年

第一回2/5

「人生の目的とは何か」

みなさんこんにちは。今日は今年最初のお話であります。いくらか暖かくなって、ようやく三寒四温、春が近づいてくるような感じになってきました。寒いので、外でお仕事をされる現場の方はいつも本当に大変だなと思っていつも拝見してるんですけど、ようやくだんだんと暖かくなってきてほっとしております。今日は今年初めてのお話ということで少し構えたようなテーマですけど、人生の目的とは何かっていうことでお話をさせていただきたいと思います。一体我々は何のために生まれてきたのか、こういう問題は誰でも何回か人生において考えるときがあると思います。自分がこの時代にこのように生まれてきたのはどういう意味があるんだろうか、一体生まれてきて自分は何をしたらいいんだろうか、この命をどう使うか、そういうことを自分一人になったときに考えられる方いらっしゃるかと思うんですけど。これは哲学において大きなテーマとなっています。人生に目的があって初めて、命というのは生きがいを感じるので、目的なしに生きているところから、生きがい、生きる喜びっていうのは生まれてきません。我々は自分がこの世に生まれてきた理由、あるいはなぜ自分はこの時代に生まれてきたのか、自分がこの時代に生まれてくることにどういう意味があるのか、一度は真剣に考えてみる必要がある問題であります。哲学的には、人間が生まれてくる目的というものは実は二つしかないんですね。これはどういうことか。まず一番目に人間が生まれてくる理由は、自己実現の人生を生きるためだというふうに言うことができます。二つ目は、我々はみんな新しい時代を呼び起こすために、新しい時代・歴史を作るために生まれてきたんだ、ということができるんです。なぜこのふたつがすべての人にとって生きる目的、人生の目的というふうに言うことができるのか、その根拠はなんなのか？ 人生を生きるということは人間としての命を生きるということである。その意味では、人生というものを学問的に考えていく場合には、命という次元から考えていかないと、人生という、人間としての生き方の目的というものを学問的に、根拠を持って語ることはできない。そこで人生の根底に命がある、ではその命とは何なのか。命の目的といったらなんなのか。命っていうのはね二大目的と言って、全ての命はこの二つの目的のためにしか生きていないという生物学的には言われるわけであります。生命とは何を目的に生きているのか。それは中学の教科書にも出てくるような話ですけども、生命の目的は自己保存と種族保存である。全ての生命は事故保存と、種族保存のためにしか生きていないというのは、命というものから考えた場合、生きる目的というふうに言うことができるものです。自己保存も種族保存も現実には、自己保存の欲求と言われ、種族保存の欲求と言われて、本能的な生きるチカラとして二つのものはすべての生命に備わっているというふうに言えます。自己保存の欲求というものが、人間という命から出てくるとどういう風に表現されるかというと、人間という命から自己保存の欲求が出てくると、意思になる。生きようとする意思になる。自己保存の欲求から出てくると、意思になる。この意思と言ってもストーンの石ではない、ウィルである。では、ウィルとはなんなんのか？ これは、自己実現の力、自己想像の力、自己完成の力というものができるものであって、意思の弱い人間は、物事を途中放棄する、意志の強い人間しか自分が納得できる人生を結果が出るまで歩み続けるという人生を生きることができない。意思の目的は自己実現であると考えたら、人間にも自己実現の欲求というものがある。自己実現は人間から出てくると意思になる…意思は自己実現の力だ…そういうふうに考えれば、我々はなんのために生まれてきたのか、それは自己実現の人生を生きるために生まれてきたんだと言うことができる。自己実現の人生とは、自分らしい人生、個性ある人生、自分が納得できる人生、幸せな人生、成功の人生、そして、健康な人生。それが、まず人間が生まれてきて、目的とする生き方の目標となるものであります。幸せと健康と成功です。それが自己実現の人生を生きるということになる…。

会社に就職ということも、自己実現の人生を生きるための道筋として、社会に出て就職をして仕事をするということがあるわけです。会社に就職をするとはどういうことなのかと言うと、自分はこの会社の発展のために努力します・協力します…それがこの会社に就職するということの意思表示の意味であります。この会社に就職して仕事をすることによって自分の自己実現の人生を生きていく決断をしましたっていうのが就職ということに関する人生哲学的な意味になるわけですね。この会社に就職した人間が、就職してから会社に中のいろんなことに対して、不平不満を言うようでは、それは就職の時の誓約を裏切ったってことになってくる。会社に入って不平不満を言っては、その会社に居る意味がない。もし不平不満があるならば、不平不満として表現するんじゃなくって自分はどうすればこの会社がもっと良くなり、会社が発展するかっていう会社のためになる提言提案をするということをすれば、この就職における誓約を裏切らないでその会社のために貢献するという、そういう働き方ができるわけなんですよね。そういうところまでちゃんと考えて就職する人は少ないわけではありますが。そういうことを考えて採用するということをやっておる会社側の責任者も考えてやってるかどうか、あやふやなところもあるわけでありますけども。就職っていったいどういうことなのかってことも、本当はちゃんと考えて就職してもらいたいし、ちゃんと考えてそういう人を雇うっていうこともしてもらいたいというふうにも願っております。会社に勤めて仕事をするってことは、それ自体自己実現の人生を「この会社で俺はやってくぞ」という、そういう意味を持っておるわけであります。「この仕事を通して俺は自己実現の人生、自分の人生を作っていくんだ」ということですから当然のことなんですけども、そういう決意というか、意思があるかどうかが非常に大事なことであります。

ともかく我々は生まれてくる第1番目の目的は、自己実現の人生を生きるために我々は生まれてくるんだ。自分らしい人生を自分で作るために我々は生まれてくるんだ。「これが俺の人生だ」という自分らしい存在感なる、生き方っていうものをやっていく…そこにまず我々が生まれてくる最初の目的がある。全ての人に課せられた、命・生命というもの、人間という命に課せられた、すべての人に共通する人生の目的、自己実現の人生を生きるということなんですね。自己実現の人生を生きるということのためにしなければならないことが、まずは本当の自分とは何なのか、本当の自分とはなんなのかってことを知らないと、自己を実現するという、そういう人生を歩むことができませんので、まずは自己を実現するとは何を実現することなのか、何を実現することが自己を実現することなのか、何を実現すれば、自己を実現したことになるのか。そこから考えていかないと本当の自己実現の人生を歩むことはできない。自分が自分で自分がなんなのかを知らないで自己実現の人生を歩むことはできません。まずは自分の人生をつくっていこうと思ったら、「俺とはなんなのか」何を実現したら、俺の人生と言えるのか、そのことを考えていかなければならない。

その観点から真実の自己とはなにか、本当の自分とは何かと言った場合に、その答えは三つ出てきます。レジメにも書いてあるように、本当の自分とは欲求である。なぜ理性ではないのか？ 理性というのは、みんなに共通する能力なんです。みんなに共通するものを作り出すのが理性能力なんですよね。理性的になればなるほど、個性がなくなる。理性的になればなるほど、自分から遠ざかる。理性的になればなるほど、自分らしくなくなってしまう…この理性というものの働きであります。

だけど、欲求というものは自分の命からわいてくるものですから、この欲求こそ、本当の俺ということが言えます。欲求がないということは、俺がないと言えます。最近よく「君は何がしたいのか？」と問われても「いや、特に何がしたいということはないです」と答える人が案外多いと言われています。青年に限らず、相当年齢を重ねた大人の方でも自分のしたいことがわからんという方が多いんですよね。自分のしたことがない、わからないという人は、結果として他人から誘われたり、言われたり、命令されることをするしかありませんので、欲求のない人間は奴隷のごとき、人の命令を従って生きていくしか無い。奴隷や家畜のごとき生き方をせざるを得ない状況に陥れられてしまう。

清原選手も、残念ながら麻薬の問題で捕まったりして、非常にもう二度と立ち上がれないかなと思うような状況にありますけど、あれも現役を止めてしまって自分のしたいことがわからなくなってしまって、人に誘われて、誰に誘われたかわかんないけど、とにかくは麻薬を常習することに引き込まれてしまった。本当に自分はこれがしたいというそういうものはないので、人の誘いに乗ってしまうそういうことになってしまったりなんかするんじゃないかなと思ったりなんかしますね。離婚してしまって、がっくり来たって言うかね、もう何のために働いたらいいんや。これまでは女房や子どものために働いとったんだけど、野球辞めてしまってこれからどうしたらいいんやってね。離婚してしまったらもう働く目的がなくなってしまった、そういうこともやっぱり麻薬に手を出すようなことになってしまった原因になるかもしれませんよね。したいことがないと、どうしてもやっぱり自分の人生作れないですよね。ついつい人の誘いに乗ってしまって、人の意思によって振り回される…そういう奴隷・家畜のごとき人生になってしまいかねない。本当に自分の人生を生きようと思ったら、自分の命から湧いてくる欲求・欲望・興味・関心・好奇心に命から湧いてくるものが本当の自分だということを忘れてはならない。命から湧いてくるものがなくなったら、自分を見失ったということができる…。特に欲求ということ申し上げるのは、欲求が湧いてこないと何をしていいかわからないし、欲求が湧いてこないと行動力・実践力がなくなるんですね。命から湧いてくるものが行動力・実践力のエネルギーになってくるわけで、また命から湧いてくるものがないと、命は燃えないんですね。こうしたい、ああなりたいと思わないと、命は燃えません。命が燃えないと、ただ生きているだけで、ただ生命があるだけで、生きようとして生きていない。命が生かされていない…ということは輝きがない、生きがいがない。欲求が湧いてこないと、命が燃えない、輝かない。欲求・欲望・興味・関心・好奇心が湧いてこないとやる気が出てこない、行動力・実践力が出てこない。やろうとする気が起きない。本当に私は何がしたいのか、ということをわかっている人がほとんどいない…という時代になってしまった。残念ながら、長い間の学校教育のせいで、したいことはさせてもらえない、やらなければならないことをやらされてきた。そういう状態で結果としても自分のしたいことがだんだんだんだんわからなくなってくる。自分のしたいことがだんだん出てこなくなってくる。もう義務と責任感だけで何かしなきゃならんことばっかりや、っていう。そういう状態に命が陥れられてしまって、結果として何をしていいかわからないという人がほとんどになってしまったんですね。では、何がしたいのかわからないという状態になってしまった人が、どうすれば自分の本当にしたいこと、本当の自分と出会えるのか、どうすれば我々は本当の自分というものをつかめるのか、そのことを真剣に考えていかないと本当の自分の人生を生きる、自己実現していけるということはできないで死んでしまいます。

本当の自分と出会うためにどういう方法があるのかと言ったら、まずは理性を手段能力に使って自分の命、自分の感性に問いを発するんですね。どういう問いを発するかと言うと三つの問いがあって。理性を手段能力に使って、自分の命に向かって、自分の感性に問を発する。まず第1番目はどんな人間になりたいのが、どんな人間になりたいのか。二番目はどんな仕事がしたいのか、何がしたいのか、どんな仕事がしたいのか。第三番目は将来どういう生活がしたいのか、この三つの問いを発することによって、自分の命から俺はこんな男になりたい、私はこういう女になりたい、俺はこういう経営者になりたい、俺はこういう先生になりたい、私はこういうお母さんなりたいとか、そういう人間としてのなりたい欲求ってものが、自分自身に対して、どんな人間になりたいのかを問うことによって、自分の命から、なりたい目標を湧いてくるという構造になります。どんな人間になりたいのか、だけど人間というのは別に抽象的な存在で、男と女だけですから、男であったならば必ず何回か人生において問わなければならないのは、「どんな男になりたいんや」ということです。どんな男になりたいのかを決めずして男の人生は始まらない。どんな男になりたいかってことがちゃんと決められてないと、自分ながら自分がどうなっちゃうかわからん人生になるわけですよ。これでは生きてるとは言えない。それでは現実に振り回されて流されてるんですね。船に乗って「どこ行くの？」と言われて「別に」って言っていては、波に流されるままに流されるしかないですよね。「あそこへ行くんや」と「あそこへ行きたいんや」って言って初めて波を切ってでも、その目的に向かってまっしぐらにブレないで進んでいくことができる。それは人生の生き方の基本。目標を定めて、そしてその目標に向かって問題を乗り切って、波を切って進んで行く。それが帆を張って、波を切って、海原を突っ走る船の姿であり、それが人生の生きる姿に同じを映して考えることができる。とにかく目標を設定してないと、今何して良いかわからない。まず男ならばどんな男になりたいのかってことを決めないと男の人生は始まらない。だけど今突然どんな男になりたいのかと言われても出てこないかもしれませんから、出てこなければ「お前どんな男になりたいんや」って自分で問うて、そして自分のなりたい男を探して求める、男探しをしなければならない。その男探しをするために我々は本を読んでドラマを見て、劇を見ていろんな人に会って俺はこんな男になってみたいなーっていう人物と出会う。そんな男と出会うという模索的な努力をしなければならない。

男の人生はどんな男になりたいのかを決めるところから始まる。今この男になりたいと思っても、また何年か経てば、また違った男像が自分の目標になることがある、そういう人生の目標は変わっていってもいいんですよ。変わっていってもいいので、いつでもその時点においては、こうなりたい、その時点においてはこれが自分の求めるもんだというものがないと、今の自分生き方が定まらない、決まらない。自分の生き方が自分の意志で生きているという人生にならない。

その時点その時点における自分の理想・目標というものがちゃんと定まっているということが、今を無駄に過ごさないで、ぶれないで目標に向かって人生を作っていけるということになっていくわけであります。女性もやっぱりどんな女になりたいのか、どうなりたいのか、どんなお母さんになりたいのか。女性も母性を持っている限りは、男性が求める父性とは違う、女性を父性というものを持ってどのように成長していくか、これがこれから本当に女性の時代と言われてですね、男性がダメになるわけじゃないんだけど、あまりにもこれまでで女性の方々の人生は男性によって抑えつけられてきた。だけど、これからは、女性は自らの意思に基づいて自分の人生を作っていけるという時代になってきたわけであります。だけど、まだまだ男の後からついていくのが良い、そういう感じの女性があまりにも多すぎて、本当に男を育てることができるような力を持った女性のリーダーってなかなか出てこない。やっぱり女性は母性を持ってますからね。母性があれば、子供を育てることができると同時に男も育てられる。男らしい男に女性が男を育て上げるんだと、自分の主人をも夫として成長させ、育てられるのが、母性の素晴らしさであります。そんな母性を持った女性の経営者がでてこなければいけない。母性を持ったリーダーがでてこなければならない。あらゆる人を我が息子、我が娘と考えて、母性を持って導く。そういう母性の知恵というものが、すべての女性に潜在的に与えられているわけではあります。そういうリーダーの出現を人類は切望している。残念ながら男性のリーダーが歴史をつくる時代は終わった。これからは女性が人類の先頭に立って新しい時代をつくっていくという、そういう歴史をつくっていかなければならない。いわゆる父性の時代から母性の時代へと言われています。人類は平和を求めていかなければならないという時代の中で、母性の持つ役割は大きいと言わざるを得ません。そういう意味では女性の方にはもっともっと目覚めて、女性としてリーダーになって、男をも育てられる、本物の男を育てることができるような母性の力を持った女性が活躍する時代になってくるんだ。そういう意識を持って、女性の方ももっともっと女性として立派な人物になってもらいたいと願うわけであります。だからこそ、女性もやっぱり自己実現の人生を考えていかないといけない。男性の後をついていくという従属的な人生ではなく、自分で自分の人生を切り開いていく…決して男と喧嘩をするわけではなく、男女平等でお互いに助け合いながら、協力をしながら、どのように新しい時代をつくっていくかを考えていかないといけない。まずもって、女性も自立しなければならない。自立した女性と自立した男性がいて、はじめて助け合うことができるのであります。どっちかがどっちかにもたれかかっていたのでは、本当の人間としての人生を歩んでいくことができない。両方が自立して、はじめて助け合うことができる。自立していないと、片方にもたれかかるしかない。もたれかかっていたのでは、相手の負担になってしまう。両方共が自立して、お互いが力を併せて、ふたりの人生をつくっていくのが、家庭である。女性も男性も自己実現の人生を真剣に考えて、自立した自分と相手がお互いに力を併せて、相乗効果としての家庭をつくっていく必要があると思います。

そのためにもまずは自己実現の人生を生きるために必要な自分とは何なのかということから考え、まず自分とは欲求だって言うことを忘れてはならない。欲求がない=自分がない。欲求がある=自分がある。欲求がなかったら自分の人生を作れない。欲求がなかったら命は燃えない。欲求がなかったら行動力が湧いてこない。行動力がなかったら何もできない…。ただ考えてるだけで欲求を湧いてこなかったら何もできない。理性でどんな立派な理想を考えても欲求が湧いてこなければ理想は実現できない。行動しなければ理想も実現できないですから、欲求が湧いてこないと行動力が出てこないですから。理想も絵に書いた餅になってしまう。本当によく言うならいくら抑えようとしても抑えきれない欲求が湧いてこないと、本当の燃えるごとき人生は始まらないんですよね。燃えようと思ったら、抑えがたき欲求が湧いてこないとならない。その抑えがたき欲求をどのように自分の命から引きずり出すか、自分の感性をどのように呼び覚ますか、これが自分の人生をたくましく生きるための出発点の課題であります。

そのために自分の命から激しい欲求を呼び出そうと思ったら、理性を手段能力に使って三つの問いを命にかけなければならない。ひとつ目はどんな人間になりたいか。ふたつ目はどんな仕事がしたいのか。みっつ目は将来どんな生活がしたいのか。男ならどんな男になりたいのか、女性ならどんな女になりたいのか、どんな妻・母になりたいのか。経営者ならどんな経営者になりたいか。それを決めてそうなれるようにするというのが、本物の経営者の自己実現のあり方であります。ほとんどの方がどんな経営者になりたいのかを決めないで、適当にやっておったらなるようになるんじゃないのということで、あなた任せのそのときばっかりの理想なき生き方というものをしておる人が非常にまだまだ多いですね。こうなりたいというものがなかったら、どうなるのかわからないということですから。どうなりたいのかわからんようじゃ、生きているんじゃない。流されているんだと。それは自分を見失っている状態ということ。

2番目にどんな仕事がしたいのか。どんな仕事がしたいのかと言っても今もう仕事をしているんですから。今の仕事というものを通して、どう自分の人生をつくっているのかを考えないといけない。だけども、仕事をしていると言っても、本当にしたい仕事をしているのかと言ったら、そういう訳ではない人がまだまだ多い。就職するということは、先程申し上げた通り、この会社に勤めて、この会社の発展に協力することを通して、俺の人生をつくっていくんだというのが、就職の意味でありますから。この会社に就職した以上は、この会社の発展に尽くすということに能力を発揮していかなければならない。そのためには、今自分がこの会社に就職していろんなことをやっているでしょうが、就職したこと自体が、それほどの決意をして就職した訳ではないかもしれない…だけども、人生というのは、自分の意思とは違うものに導かれて、そして、いろんな尊い出会いに巡り合わすことが多いんです。結婚も巡り合わせで、ご縁があってはじめて生まれてくるもので、いろんな意味が縁にとって結びついていますから、そこには人智を超えた計らいと言って、自分の意思で選び取ったものではないものに自分が関わっている場合には、それは人間の思惑を超えた天の計らいと受け止めていかないと、いちいち出会いに逆らっていたら、作為に陥ってしまって本当の素晴らしい人生はやってきません。あらゆる縁を天の導きと考えて、それを受け入れていくところに作為ではない、天の意思に導かれて、必然的なというか、…どうしても作為に陥るといろんな、自分本意な、自分中心なことがはたらきますので、作為に陥ると物事は自分なりに歪んでしまう…だけど、いろんな起こる出来事を「それは嫌だ」と判断をしないで、これは天から与えられたご縁だと思って受け止めていくことによって、作為がない、自然に道が拓かれている…ということがあるわけでありますけども。よく昔から「万象これ皆我が師なり」と言って、すべて皆現象は自分にとって師=先生と言えるものだと、昔からの言い伝えですから、長年の間、検証されてきた言葉ですので、この言葉は重い。万象これ皆我が師なり、あらゆる現象は、自分に何かを教えてくれていると。何か身の回りに起こる現象は、自分に何かを伝えようとしている。一体、この現象は何を俺に伝えようとしているのか？

俺はこの現象から何を学んだらいいのか？そんなことを考えながら、いかなるものをも拒否しないで受け入れていって、その意味を自分に問うていくことで、あらゆる現象が自分の人生の足し=プラスになっていくという生き方もあります。自分の身の回りに起こる出来事を俺にとって良かったと思えていけたら、確実に物事はどんどんどんどん良い方に展開していくんですよ。これはちょっと都合が悪いと思って、避けて通った方が良いと考えると、そこに作為が出てきて、だんだん物事は歪んでしまう…悪い方に動いてしまう。良かったと思ったら良い方へ動く。困ったと思ったら悪い方へ動く。これが人生なんです。あらゆる出来事を自分の人生のプラスに解釈していく。アサヒグローバルに就職したことも天の導きで就職したと思えば、この会社の中で起こるすべての出来事が自分の成長のために関わっている、自分のためになると、そのように受け止めていけば、成長することができる。あらゆる問題は自分を成長させるために起こるし、あらゆる問題は会社を発展させるために起こるんだと。だから、この会社で働きながら出てくる問題は自分を成長させ、自分をつくってくれるんだと思えば、すべて自分づくり、自己実現の人生を生きているということになるわけです。

そういう思いも自己実現の人生を生きるためには大事です。もうひとつは、今日の仕事というのは、何かに特化することが大事な時代です。何を持って、俺の力だと証明するか、これが俺や、これが俺の力や、これが俺の特徴、特質、自分らしさがあると言えるものをどれだけ自分が持っているかが、会社における存在感をつくることになるわけです。このことにかけては、あいつ以上のやつはおらんと。だから、このことはあいつに任そうと。そう言われるような存在感をこの会社の仕事の中でつくっていかなければいけません。全社員がなにかの専門家になること、これがこの時代を生きるために求められている人間の能力の持ち方であります。なんらかの点で特色のある人間になること、何を持って俺というものを人に認めさせるか、何を持って自分という存在証明にするか。ある意味では、なんでもできるという人はあまり価値がない。「何でも屋はいらん。これにかけてはこの人しかおらん」という人間にみんなが目指さないといけないという時代なんですね。だけども、往々にしてまだまだ株式会社というのは、いつどこに飛ばされるか、いつ何をやらされるかわからないという不安定な職種の移動（異動）などがあって、何でも屋にさせられてしまうという環境が、まだまだ株式会社にはあるということです。本当に大事なのは、これしかできんけど、これにかけては俺が一番だと、そういう人間がどれだけおるかによって、その会社の質と価値が決まるんですね。そういう会社にとって、「お前がおらんと困る」、「これにかけてはお前や」と、そういう存在感のある社員にみんながなれるように努力をするということが、非常に大事であって、いろいろ今やっているけど、どれの専門家になるか、どのエキスパートになるか、どの仕事で自分が頂点に立つか、何に特化するかをもっともっと決めて、そして自分なりに努力することをこれからの自己実現の仕方として非常に大事な課題であります。全世界の企業が何に特化するかを競い合っているんです。とにかくグローバル化した現在の世界において、仕事上の目標はひとつしかない。何をもって世界の頂点に立つかということ。何をもって頂点を極めるか。それしか今の社会には目標がない。世界一というと難しそうなイメージがありますけど、オンリーワンとナンバーワンがありますから。ナンバーワンで同じようなことをして競い合っては苦しいですが、オンリーワンなら、独特なものをつくったら、たちまち個性は世界に知られて、世界からアクセス・お呼びがかかるようになる…そういう時代なんですよ。一瞬にして良いものはネットで世界に発信される。どんなに小さい会社でも、人類が求めているような「これや」というようなものをつくったら、一瞬にして世界の大企業になってしまうのが、グローバル化、この激動の時代の面白いところなんですよね。

こんなものは世界で誰もつくったことはない、こんなものよう考えたな…そんなことを発信できる会社になっていかねばならない。地域一番では生ぬるい、日本一でも生ぬるい…世界の頂点にどうして立つかということが今日の世界の目標であります。

建築の面でも、高齢化社会においても、老人を対象とした施設面でも、人々が求めているものをつくっていくということが、大事なことで、しかし、人々が求めているものをつくっていたら、求めているものに縛られてしまうので、その一歩先を目指すととてつもない発展が待っているんですよね。あまりにも先のことを言うと、手が届かない状況になって、ぱっとしない・売れない…しかし、人々が求めている一歩先のものを提供すると飛びついてくる。プロという集団が消費者という素人に対して主体的に関わっていくやり方なんですね。消費者が求めているものをつくっていては、消費者に主体性がある。消費者に振り回される。プロとしての誇りを持って仕事をしていこうとするならば、消費者すらまだ気付いていないちょっと先のものを提案してみせる…そして、「これや」と消費者に言わせてみせる。それがプロという集団が持っている素晴らしい力になるわけですね。とにかく、今日の世界は、何をもって頂点に立つかが、大きな目標であると、そのことを忘れないで、個性のある、特色のある、そういう仕事の仕方ができる自分というものをつくっていってもらいたいと思います。何に特化するか、何をもって自分の個性を示すか、自分の存在感を示すか。今、自分の行っている仕事の中でも何の専門家になるか、これで俺はこの会社の頂点に立とう。これで俺は存在感をつくっていこうと、そういうものを個々に決めて、そして、この会社の役に立つことを通して自分の自己実現の人生をつくっていくことを考えてもらいたい。

三つ目は、将来どんな生活がしたいのか。みじめな生活がしたいわけはないのですから、将来こんなリッチな生活がしたいとか、田舎にひっこんで畑で自給自足でゆったりしたいなど、将来憧れるような自分の人生の理想があると思います。それらを自分に問うて、具体的な夢・目標にして頑張れるわけです。

なぜ人生に理想が必要なのか、夢や希望が必要なのか。これらはいかにも先の目標のように見えますが、実はそうではない。理想といえども、夢といえども、今の生きている人間が考えるものです。現実的には今生きている、現実の只中にあり、夢や理想でも現在である。それはどういうことかと言うと、理想・夢は人間に今を生きる力をつくってくれる。理想や夢がなければ、今何をして良いかわからない。理想や夢があるから、そのために今何をしたら良いかがはっきりする。理想・夢・目標とは今を生きる力だ。理想・夢と言えども現実の只中にある。それが理想と夢の人生における意味であります。

いかなる苦しいときも、夢があれば耐えられる。夢がなくなってしまうと今の辛さに押し潰されてしまうんです。負けてしまうんです。夢があれば、今の辛さに勝てるんです。夢は今の生き方を支えてくれる。夢があるから命を燃やして鮮烈に鮮やかにブレないで生きることができる。理想・夢があるからブレない。

このように我々はどんな人間になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいのかを自分に問うことによって、実現する価値のある本当の自分というものと出会うことができる。本当の自分をつくったのならば、それをどのようにして実現していくか。本当の自分の人生を自分でつくっていけるという道に入ることができるわけであります。

いかに人生において欲求が大事か、欲望が大事か、興味・関心・好奇心が大事か、命から湧いてくるものを実現するという人生を生きなければ、自分の人生を生きているとは言えない。欲求そのものを考えると、それだけでは野獣の次元なので、人間は人間的な人生を生きるための価値がある欲求とはなんなのか？を考えると、どんな人間になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいのかを問うて、男ならどんな男になりたいのか、女性ならどんな女になりたいのかなど、人生を人間的なものとして生きるための欲求と言うことができます。欲求とは命から呼び出すことができるんだ。どんな人間にも自分がありますから、必ずその自分は命の中に内在していますから、それを引っ張り出せば、自己実現の人生が始まるわけであります。

もうひとつは天分。どんな人間にも能力が与えられている。他人よりも素晴らしい力が生まれながらに与えられているんです。学校に行って勉強ができないと言っても、必ずその人には他人よりも素晴らしい、独特の力が与えられている。この天分のツボにハマったら、とてつもない素晴らしい人生がやってくる。どうしたら天分のツボにハマることができるか、自己実現の人生を生きるために大事な課題であります。

本当の自分とは天分だ。天分とは才能である。才能・素質。なぜ、すべての人間に天分があると言えるのか。どんな人間でも長所半分、短所半分と言えます。長所とはなんなのか？これは生まれながらに命に与えられている天分が、人生の様々な出会いによって引っ張り出されてきたものを長所と言っています。どんな良いものを持っていても出会いがなければ、出てこない。あの先生に出会えたから、もういう能力が出てきた。あの本を読んだから興味を持って仕事をするようになったなど、出会いによって才能は命から引っ張り出されます。だけども、それが出てくれば長所と言われますが、出て来る前の命に内在しているものを天分・素質と言われるものです。どんな人間でも天分はある。最高の人生を送ろうと思ったら、天分のツボにハマる人生を志さなければならない。どうしたら天分のツボにハマるのか。なんですべての人間に天分があると言えるのか。天分を証明するものはなんなのか、それは顔なんですね。顔が違うということは、自分には他の人ができない何かができる。自分が最高と言えるものを持っているんだということを顔が表現しています。顔とは、天分の証明と言える。顔をつくっているのは、遺伝、遺伝子。遺伝子によって顔の形はほとんど決まってしまって。全人類、みな顔が違う。ちょっと似ていると言っても、厳密に言えば違う。遺伝子が顔をつくる。遺伝子とはなんなのか？遺伝子とは能力が物質化したもの。能力が物質化した遺伝子によって、顔の形が決まって、顔の形は全人類、みな違う。つまり、それはそれぞれによって、その人だけの独特の才能があるということが証明されるということです。これはすべての人間に対して、限りない希望と勇気、自信を与える究極の原理です。顔が違うということは、俺にしかできないことがある。俺は他の人間ができないことができるんだ。俺は最高という一面を持っているんだと。俺はそのツボにハマったらすごいことになる…。これが天分というものの意味ですね。これは生物学的、遺伝学的事実ですから、俺はそうは思わないとは言わせません。それを受け入れて生きていくしか無い。貴重な原理ですよ。顔が違うということは、俺は最高という一面を持っているんだと。それがなんなのかをわかったら、世界一になれる。ナンバーワンかオンリーワンになれるんだと。その希望を自分の顔が与えてくれてるんですよ。この自分の顔を生き抜けば、確実にオンリーワン。顔はすでにオンリーワン、世界一。すでに顔は世界一でオンリーワンなのですから、その顔を生き抜けば、なんらかの能力においても世界一になれるんです。可能性としてはね。だけども、それは天分や能力は潜在能力ですから、引っ張り出すにはそれなりの努力をしないと出てきません。なんもせんと「俺は世界一や」と言っていても世界一にはなれません。命の中の潜在能力が出てきたら世界一。出てこさそうと思ったら、努力をしないといけない。

スケートで人類未踏の最高得点を叩き出した羽生結弦くんでも、300点以上出したときのインタビューで、血の滲むような努力の結果ですと答えていました。あの天才でも血の滲むような努力をしないと、あの才能を引き出せないんです。普通の人ならやめてしまう、諦めてしまう、そこを乗り越えて、努力をする。なんで努力ができるのか、諦めないのか、なぜ才能があればそれができるのか。それは、だけどなんとかしたいなと思えるんです。そのだけどなんとかしたいなと思う欲求がさらに頑張らせて、血の滲むような努力をさせる…それは才能、潜在能力があるからその努力ができる、したいと思えるんです。フィギュアスケートだけではなく、体操選手の中にもふたりすごい選手がいますね。自分の名前がついたすごい技を繰り出す選手、彼はお父さんを喜ばせたいという気持ちから、お父さんの指導と自分の努力により、新しい技を編み出していく…その努力も普通の人間にはできない。苦しい努力の先に、技をどんどん編み出していく。天才は努力だと、よく言いますよね。なんぼ天才でも努力なしでは才能も出てこない。また、努力をすれば、努力しただけのものが必ず出てきます。努力を信じようというのが、アスリートの世界では常識になっていますよね。とにかく、重大なことは、顔は天分の証明だ。顔は自分には独特の能力があることを証明しているんだということを忘れないようにしてほしい。これを自分のお子さんやお孫さんに伝えてもらいたい。結婚をしていない方には、自分自身に信念を持ってもらいたい。私の顔は世界一や、何らかの能力においては世界一なんだと。能力を引っ張り出せたら私はオンリーワンで世界の頂点に立てる…これは生物学的事実ですから、誰も反論や異論を挟む余地がない原理です。

では、どうしたら自分が世界一になれるような天分、才能を見つけ出せるのか。この方法論があるんです。天分を発見する方法というのは、すでに何回もこの講座でお話をさせていただいていますので、長年聞いていただいている方は、またあれやと思われ、もういいわと言いたくなるくらい何回も話した原理ですが、天分の発見方法は5つあります。

もったいぶって言っている場合は、どんなものやと期待をされる方もいるかと思いますが、言われて聞いてみると「なんだ、そんなことか」と思うと思われます。「当たり前やん」と。だけども、言われないとわからないものなんです。

第一番目、やってみたら好きになるかどうか。多くの人が「なんだ、そんなことか」と思っていると思いますが、実はこれがすごいことなんです。やってみたら好きかどうか。例えば野球を見ていて好きでも、天分とは関係ない。やってみて、好きになったら天分がある。好きになったら絶対やらないといけない。これが、天分の見分け方。なんでか？天分というのは、能力なんですけど、これまでの学者は精神的なものだと、能力は意識的なものだと考えていた。だから、天分は発見できなかった。だけども感性の哲学は、遺伝子の研究の成果を学んで、天分は物質なのだと。天分は精神ではない、物質、遺伝子なのだと。遺伝子は肉体の一部分なのだと。このことから、天分を考えていくことができたんです。遺伝子の研究の成果を学んだ結果ですけども。遺伝子は能力が物質化したものだと。天分は物質なのだと。能力は精神ではない、物質、遺伝子なのだと。遺伝子は肉体の一部分なのだと。つまり、肉体を動かしてやってみないと、その能力があるかどうかはわからないという話です。肉体を動かすこと無く、能力があるかどうかなど、わかるはずがないということです。やってみて好きになったら絶対になれる。やってみて好きにならなかったら絶対にプロにはなれない。しかし、プロになろうと思ったら絶対に努力は必要。努力なしには天分も能力も出てこない。可能性の判断は、やってみて好きになったら天分はある。好きでもないのに続けたら、辛い・苦しい人生が待っている。これまでの学者はこの結論にたどり着けなかった。才能は精神だと思っていたから。しかし、才能は物質であり、遺伝子であり、肉体なんだ。肉体を動かしてやってみないと、その能力があるかどうかはわからない。どんな人間でも天分が見つかる力をつくっていくやり方があるんです。

第二番目は、やってみて興味・関心が湧いてくるかどうか。第三番目は、やってみて得意と思えるかどうか。そのときにどんなに他人より優れていなくても、得意だと思えれば、やり始めるとぐんぐん伸びる。逆にどんなに他人より優れていても、自分が得意だと思えなければそれ以上は伸びない。

第四番目は、他人とやってみたらいつも自分の方が優れているということ。何回か負けることがあれば、ほかごとにシフトチェンジしなければならない。

第五番目は、真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくるかどうか。どれだけ真剣にやっても問題意識が湧いてこない、言われていることを言われているままにやっているのであれば、その人独特の才能は存在しない。言われたことをやり始めたら、ここはこうしたら良いのでは、おかしいな、納得できないなぁと、問題意識が湧いてきているということは、自分が出てきているということなんです。そこには、独特のものがある、問題意識の湧出。だから、ノーベル賞をもらうような研究は、全部そこから始まっている。みんなそれで良いと思っているかもしれないが、自分は少しおかしいと思う…ここからノーベル賞をもらう研究も始まっている。命から湧いてくる「ちょっとおかしいと思うな」が出発点となって研究を始める。問題意識がなければ、新しいものはでてこない・つくれない。命から問題意識が湧いてくるということは、命から自分が出てきているということ。問題意識が出てきたところには、その人独特の才能が宿っているんです。とにかく、5つの発見方法は、やってみたら好きになること。やってみたら興味・関心が出てくること。やってみたら得意と思えること。他人とやってみたらいつも自分の方がよくできること。真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくること。この5つが天分の発見方法。なぜ断定的なことが言えるのかと言ったら、この天分の発見方法は、現実の社会の中で証明された原理だから。現実の社会の中で成功した人は全部5つのどれかで成功しているから。これ以外にないんです。成功した人は、好きなことをやって成功したか。興味・関心あることで成功したか。得意なことで頑張ったか。人よりもよくできてしまうことで頑張ったか。問題意識に人生をかけたか、この5つしか成功パターンがないんですよ。この原理は現実の社会の中で実証を通して証明された原理だ、だからこれは確かだと言うことができる。この方法を使えば、自分の才能も発見できる。子どもも部下も、すべての人にこの原理は適応できて、その人を世界の頂点に導くことができる…そういう原理なんですよ。

だからこそ、みんなその可能性があるんだからね、俺は何をもって世界の頂点に立とうか、何をもって世界の頂点に極めるか、そのことだけを考えて生きないかん。みんなにその可能性があるんだから。なんでこんなことをみなさん方に偉そうに喋られるのかというと、感性論哲学というのは、私がつくったもので、過去に感性論哲学はなかったんですよ。感性を原理にした哲学をつくったのは私が初めてなんですよ。だから、感性論哲学というのは、ナンバーワンでないにしてもオンリーワンであることは確かなんです。この感性を原理にした哲学や生き方を語れるのは、私しかいないんです。だから、感性論哲学の勉強をしようと思ったら、全世界の人が私の本をまず読むんですよ。私の書いた本が感性研究のたたき台になるんですよ。私の書いた本は全世界から注文が来ます。日本語で輸出されているんです。日本語で読んで研究するんです。外国の人から見たら、日本語で書かれた私の本は洋書、原書ということになるわけです。向こうの大学には日本語でちゃんと読める人がたくさんいらっしゃいますから、英語やドイツ語で書いてあげなくても、本当に知りたい方は日本語で読んで研究します。そういう時代になってきています。

今は、アジアから発信されるものが、世界の新しいものをつくるということになっているんですよ。もう欧米には未来はない。いかに欧米人が優れていても、素晴らしいと思っていても、欧米にあるものは過去だけです。欧州に行ってみな感動して帰ってくるのは、中世末期からルネッサンスにかけて、彼らがつくった完成度の高い建築や芸術作品に驚いて感動して帰ってくるんです。欧州に過去はあっても未来はない。欧州は、過去を遺産に生きている国家である。欧州人にも米国人にも未来はつくれない。今年は米国で大統領選挙がありますが、選挙があるたびに米国はどんどん衰退していく、もう米国に未来はない。これから世界を導いていく指導者はアジアから出てくる。もう未来はアジアにしかない。未来をつくる力はアジアにしかない。そのアジアの中でも日本がアジアの魂を握っている。アジアにおいて生まれたすべての素晴らしいものは日本の中で完成度の高い文化として保存されておる。中国にもインドにもアジアの魂と言える文化の、最高に完成度の高いものは存在しない。仏教はインドで生まれたものですけど、インドでは仏教はヒンドゥー教に吸収されてしまって、仏教独自の発展は3世紀で止まってしまっている。中国でも仏教が盛んな時代がありましたが、今では研究はされておりません。日本ではまだまだ仏教の言葉は仕事の上でも生活の上でも生きた言葉として語られています。そして、鎌倉時代には日本仏教と呼ばれる、インドにも中国にもなかった日本独特の教典がつくられて、今日に及んでいます。生きた仏教は日本にしかないという現実なんです。中国においてできた儒教老荘思想でも、中国本国においてもほとんど研究者がいない。中国の大学で研究されているのは、欧米の科学、学問ですよ。ようやく北京五輪の開会式で論語の言葉が流れましたが、ようやく中国の方々も自らが持つ文化の源流に目覚めたかなと思ったのですが、またそれ以降、共産主義者会ですから、宗教的なものを完全に否定されて、表に出てこない…。だから、生きた儒教も生きた老荘思想も、日本にしかないんです。日本において発展し続けられている。また日本では、儒教、孔子の論語など、みなさんものすごく勉強されており、たくさんの研究者がいらっしゃいます。朱子学や王陽明の研究もしておりまして、まだまだ実業の世界において儒教精神は様々な活動を支える言葉として座右の銘としても使われています。また老荘思想も道の思想と言われて、日本にだけ剣道・柔道・芸道・茶道・華道など、人間性を鍛える手段として使われております。アジアで出てきたすべてのものが日本の中に入ってきて、日本の中で完成度の高い文化となって保存されているんです。これからアジアの時代が何千年続くかわかりませんが、日本人こそこれからのアジアの時代に永遠に関わり、寄与する終身的な国家であることは間違いありません。

そういう意味で我々は、自分の持つ才能を今こそ人類のために活かすというチャンスに遭遇したと思って、もっともっと大いなる夢を持った活躍をしてもらいたい。人間、活躍はね、どういう理想や夢、希望を描くかによって決まる。自分が描く理想が自分の限界なんですよ。日本一だったらそこで自分を抑えてしまっている…世界一を目指さなかったら、自分の才能は開放されませんよ。その程度良いんだと思ったら、自分で自分を抑えてしまう。みんな世界一というものを持っているのに、その程度良いんだと思ったら、自分で自分を抑えてしまう。自分が希望したところまでしか行けない。自分が求めたところまでしか成長はしない。どうせ理想を語るなら、どうせ夢を語るなら、これ以上のない最高のものを語らないと損。日本人ならどんなことをやっても、ちょっと努力をしたら世界の頂点に立てる。いろんな職業において世界最高レベルの水準にあるんです。元から、会社に入ったときから、その会社は世界最高水準の能力と技術を持って仕事をしているんですよ。ちょっと頑張れば、世界一に立てるっている環境が職業上与えられているんですよ。科学技術においても、繊細な技術においては最先端ですからね。もうどんな職業でも日本人の能力が最先端なんですよ。これは世界一と言われる人は、世界に散らばっていますけど、職業の水準は世界一です。サービスにしてもデパートにしてもあらゆる製造業においても、世界一なんです。ちょっと頑張れば俺が世界一だと言える土壌がある。だからこそ、今こそ日本人は何らかの意味で世界の頂点に立つということを目指さないといけない。特にアサヒグローバルさんなんかは、県下一の素晴らしい、斬新な建築を提供されていますので、それを県下一、日本一だけではなく、世界をあっと言わせるような、こんな建て方、建物、形の家があるんだと世界を感動させるようなものを発信してもらいたい。全世界にアサヒグローバルの支店ができるような…そんな時代を。これも、つくろうと思えばつくれるんです。つくろうと思わないから、つくれないだけで。なんでもそうしようと思うか思わないかで決まります。そうしようと思えば、できるようになります。それにはある程度の財力のバックが必要ですけど、財力さえ整えば希望はかなり実現するはず。とにかく、自分がとこまで行くかは、自分がどこまで行けるか、どれだけの夢・理想を持てるかどうか。それ以上は行けませんので、これ以上ない理想を持つことが大事ですよね。たとえ、実現できなくても、大風呂敷と言われても、理想は自分が頭で考えうる最高の理想を描くべきです。

そういう意味でぜひ、もっともっと自分をよく見つめて、自分にはどんな天分、才能、素質があるのか、5つの発券方法を駆使して、適用して考えてみてもらいたい。これまでの自分の人生を振り返りながら、子どもの頃にはどういうことに興味を持ったかな、子どもの頃には何になりたいと思っていたかを掘り起こして、その中から今でも自分がしたいことがあるかもしれない、だけども天分は内在するもので、潜在するものだからそれなりに血の滲むような努力をしなければ出てこない…ということも知っておかねばなりません。本当に俺はそのために血の滲むような努力をできるかどうか、やっているかどうか。それをせずしていかなる才能も出てくることはありません。羽生結弦くんも血の滲むような努力をしたのですから、やればできないことはない。好きなことは頑張れるんですよ。好きじゃないことは嫌いでなくても頑張れないですよ。好きなことは少々寝なくても、少々辛くても我慢せずとも面白くてやめられないんですよ。やめられないとまらない、かっぱえびせん状態、どうにもとまらない～山本リンダ状態にもなります。突っ走る状態になります。そこではじめて人ができないことができるようになります。人が寝ているときに寝ているようでは普通。GWだと人が遊んでいるときに自分も遊んでいるようでは普通。人が休んで寝て遊んでいるときに、やらんと人以上の努力はできませんから。それでも好きなことをやっていたら、苦痛ではない。「おもろい」「疲れない」そういうものをどんな人でも自分の中に持っているんですから、見つけないと。これをやっていたら、寝食忘れるなと。その力を持って会社に貢献し、その力を持って社会に貢献し、その力を持って人類に貢献し、その力を持って世界に貢献する…そういう自分をつくっていかないといけません。だけども、それには血の滲むような努力が必要だと。しかし、人から見たら血の滲むような努力も本人にとっては楽しいんですよ。本当はね。楽しいから練習できるんですよ。とにかく、天分こそ本当の自分だと。天分のツボにハマれば最高の自己実現だと。そのために我々は生まれてきたんだと。本当の最高の幸せを手に入れるために生まれてきたんだ。自分らしい幸せを手に入れるためにこの世に生まれてきたんだと。そのための材料は生まれながらに与えてもらっている。欲求は自分、天分は自分。

後半

それでは、後半の話に入っていきたいと思います。とにかく、我々が生まれてきた目的の第一番目は自己実現の人生を生きるためである。自己実現の人生を生きようと思ったら、実現する価値のある本当の自分をつかんでいかねばならない。では、実現する価値のある本当の自分とは何かと言うと、まずは欲求であり、次は天分である。もうひとつはレジメに書いてある通り、現実への感性の実感というものも本当の自分として忘れてはいけません。本当の自分の中に本音とか実感というものがあります。自分が感じていることが本当の自分だと。本音実感の世界、これが現実への違和感、感性の実感なんですね。これも本当の自分というものをつかんで、自己実現をしていく上で大事な原理であります。現実への違和感とはどういうものなのかと言ったら、仕事をしながらなんかここのところもう少し便利にならないかな、ここ気に入らないな、間違っているのではないかなというものを現実への違和感。これはなんなのか？というと、お前こそまさにそこのところをもう少し便利にするためにこの時代に生まれてきて、今そこにおるのだと。きみが今そこにおる存在理由は、今すぐそれをするためなんだと、天が、歴史が自分にささやきかけてくれているという現象なんですね、これを現実への違和感と言います。なんか少し納得できんなと、思ったことを納得できるものにするためにきみは生まれてきたんだ、それをするためにきみはこの時代に生まれてきたんだ。それをするためにきみはそこにおるんだと。それをすることが使命であり、仕事なのだと。直接的に天が自分にささやきかけてくれているというのが、現実への違和感なんですよ。現実への違和感とは天の啓示、天啓の一瞬と言えるほどの大事な現象であります。だけども、多くの人がなんらかの意味で現実への違和感は毎日感じているはずなんですけど、ほとんどの人がそれをまともに取り上げないで、「ま、いっか」と行ってしまう…誰かがやるかと流してしまっている。これは非常にもったいない話です。この現実への違和感こそ、この時代においてきみがしなければならないことはこれやと教えてくれている現象だと、まずは知ってもらいたいです。

どうして、現実への違和感というものが、自分がこの時代において出生の本懐を遂げるほどの大きな仕事だと教えてくれていると言えるのか、それは今あるものに対しておかしいと感じるということは、自分の持っている潜在能力が今存在するものの水準をはるかに超えている場合のみなんですよ。自分の潜在能力が現実に存在するものの水準を超えていないと、今あるものに対してなんかおかしいとか、なんとかならんかと言えないんですよ、自分の持っている潜在能力が現実に存在するものと同じ水準であれば、これでいいやと満足する。また自分の持っている潜在能力が現実に存在するものより劣っている場合は、素晴らしいと感動する。つまり、感動もしない、満足もしないということは、なんとかならんかと思う場合は、自分の持っている潜在能力が現実に存在するものの水準を超えている場合のみなんです。その人がなんとかしようと思ったのなら、自分が思っている、納得できるところまでは現実を動かせる、歴史を作れるという力がきみにはあるんだと、現実への違和感は自分に教えてくれているということなんですよ。それほどに重要な価値のある現象が現実への違和感と感性の実感なんですね。

そういう意味があるんだともっともっと仕事をしながら、違和感を感じたときに自分にハっと気づかせる、そういうことが必要なんじゃないかなと思うんですね。これが本当にわかれば、現実への違和感に俺の人生を賭けるぞ、とそういう生き方ができる。そういう生き方をすれば、ことの大小は問わず、確実にこれをやったのは俺だと歴史に名を留めて死んでいく自分になれる、そういう自己実現の仕方があるんだと。現実への違和感に人生を賭けるのであれば、歴史に名を刻んで死んでいくことができる。

このようにして我々は、自分がこの時代に生まれてきた意味を理解して、そして自己実現、自己想像、自己感性という生き方ができて、結果として成功と幸せと健康を手に入れることができる。まず健康というと、欲求を実現するという生き方は命から湧いてくるものを実現しますので、そういう生き方をする方は、必ず健康になります。欲求を抑えると病気になるんですよ。自分のしたいことを抑えると、抑圧という構造ができて、ストレスによって内蔵の機能を抑えて、内臓に熱を持たせる…それがあらゆる病気に原因なんですね。内蔵の働きを理性で抑えてしまっては病気になる…内蔵の働きは天の摂理で動いています。それを人間の小賢しい理性で、欲はいかんなどと抑え込んでしまっては働けなくなる…そうなると熱を持ってしまう…そうなると〇〇炎など病気になってしまう。ガンもそういった原因によるもの。抑圧がガンをつくる。健康に生きようと思ったらしたいことを全部やらないといけない。感性論哲学というのは、108の煩悩を活かしきって生きるもの。108の煩悩をそのまま開放したら、多くの方に迷惑をかけることもあるかもしれませんが、命から湧いてくるものは宇宙の摂理の働きですので、それを抑えてはいけない。それを108の煩悩、命から湧いてくるものを全部人の役に立つように使う…そういう使い方を、知恵を持って考えていかないと人間健康にならない。楽しい人生にはならない。楽しい人生とはしたいことをする人生ですからね。したいことができない人生は、不幸な人生だ。したいことをして人に迷惑をかけては犯罪になってしまったり、嫌がられることになりますので、したいことをして人の役に立つ、それを実現するために知恵を使わないといけない。感性論哲学は、108の煩悩を活かしきって生きる。108の煩悩を自分が人生を生きる力に変えていく。煩悩とはすべて命から湧いてくるものですからね。煩悩を自己中心的なワガママな出し方をしたら、人に迷惑をかけて犯罪になってしまう…そうなったら人生台無し。命から湧いてくるものを活かしきって、人のために役立つような仕方をする…そうしたら、必ず大きな仕事ができる。命から湧いてくるものがとにかく自分なんだと。それから天分は自分なんだと、それから現実への違和感が本当の自分なんだと、これらを大事にしながら自分の人生をどうつくるかを考えてもらいたいと思います。

もうひとつの我々が生まれてきた理由は、歴史をつくるため。新しい時代を呼び起こすために、我々はみんな生まれてきたんだ。なぜそんなことが言えるのか？これは、生命の目的はふたつあると言いましたが、そのひとつは、自己保存の欲求、もうひとつは種族保存の欲求であります。これは、子どもを産んで命をのちの世に伝えていくというのが、生物学的な種族保存の欲求の目的であります。命をのちの世に伝えていく、命の歴史をつくるというのが、生命の中での大きな目的になっておる。種族保存の欲求というものが、人間の命から湧いてくるものになると、愛になる。愛とは、男と女を結びつけ、子どもを残すもの。そして、その子どもがより素晴らしい人生を生きていくことができるように文明を作り、文化を作り、歴史を作っていく。そこに種族保存の欲求というものが、人間の命から湧いてきたことによってつくられていく人間社会の現実があるわけです。

我々はなんで文明や文化をつくったのか、なぜ歴史をつくることになったのか。命というものがそれらをつくることを望んでいる…自然にやっていることだということです。それが種族保存の欲求でもある。命をのちの世に伝えていく。そして、その子どもがより素晴らしい人生を生きていくことができるように、文明をつくり、文化をつくり、歴史をつくっていく。これが、人間が生まれてくる第二番目の理由であります。人間というのは自然の中で生きることができない。人間というのは自分自身が作り出した文明と文化と歴史の中で生きるということが人間という命の環境であります。そして社会全体をよりよい方向へ発展させていくのが、より良く育て、命に幸せを与えていくために行われる人間的活動なんですね。のちの世を子どもに託して死んでいく…そのために子どもたちの幸せを願ってより良い文明・文化をつくっていって、それが歴史を形成していく。我々は歴史をつくるために生まれてきたんだ。仕事をする上でも単に仕事をして、与えられたことをやればいいんだと、流れ作業的な仕事をするのではなくて、本当に仕事をするということはなんなのか？というと、自分のやっている仕事に歴史をつくらないと人間としてこの仕事をしている意味がないと考える必要があるということです。なぜ我々は毎日毎日この仕事をしているのか？なぜなら、この仕事に歴史をつくるためだ。この仕事に歴史をつくるためには、今までの誰もやっていないことをせんことには歴史をつくれん。毎日毎日我々は、今までの人間がやったよりもちょっとでも良いことを付け加えて、そして創意工夫を重ねて毎日仕事をしているというのが、歴史の中で仕事をする、この時代に生きて仕事をするという意味。生きるということは、変化を作り出すことなんだ。変化がないというのは、死んでいるということ。仕事をしながら変化がないというのは、仕事を殺しているということ。単に言われたことしかしない、自分では考えない、流れ作業的に仕事があるからやっているだけ。これは仕事を殺しているんだ。本当に仕事をするということは、今までちょっと違う、ちょっとでも新しい、創意工夫したことを付け加えていくことが仕事をするということ。意思を持って仕事をするとは、そういうこと。今までの人間が誰もやったことのないことをすると言うと、大きなことのようだが、大きくなくてもちょっとした工夫が、歴史をつくっているんだ。それが仕事をするということ。仕事を殺すんじゃなくて、生かすためには変化をつくりださないといけない。これは生命論からした職業観。生きているというのは変化、死んでいるというのは変化しない。仕事において変化しないというのは仕事を殺している。仕事を生かそうと思ったら、仕事の中に変化を作り出し続けなければならない。そこに仕事をするという本当の意味がある。だからこそ、創意工夫を重ねていかなければならない。改良改革を続けていかなければならない。我々が生きている今の時代は、激変激動、動乱の時代である。時代そのものが我々に激しく変えろよ、変われよと叫んでいる。その叫び声に応えて、自分の身の回り、仕事を激しく変えていかなければならない。原理的変革の時代、小手先の変化ではなく、根底から、原理から変えていく…原理的変革が今、望まれている。社会は西洋の時代から東洋の時代へと変わっていく。西洋的価値観が音を立てて崩れていく、アジア的価値観がこれからの社会を支配する…それほどの価値観の激変がこれからの我々を待っているんだ。まだまだこれから、世界中にあっと驚くような大激動、大激変が生じますし、そういうことを通して過去が破壊され、新しい時代がつくられていくという歴史が出てくる。新しいものをつくろうと思ったら、過去を破壊しなければならない。破壊する勇気が創造をもたらすんだ。過去を壊すことができない人間は、創造もできない。時代そのものが西洋から東洋へとその中心を移し替えていくということは、とんでもない激変なんですよね。だから、とんでもないことが次々、まだまだ起こるんですよ。歴史をつくるということはとにかく変えていくこと。近代から次の新しい時代への過渡期だと。理性の時代が終わって、感性を大事にする、心を大事にする…そういう時代がこれからやってくる。理性の役割は終わった。理性は大事なんだけど、理性は人間の本質ではない。人間の本質は感性だ、心だ。我々はみんな理屈じゃない。心が欲しいと叫んでいるんだ。我々がこれからつくっていくのは、心の文化であり、感性文化であり、感性文明である。合理性を追いかけていては、ものは売れない。感じさせないといけない。理屈ではものは売れない。いいな～そういった感動が必要、感動を呼び覚まさないといけない。感じさせないと肉体は動かない。感じさせないと肉体は動かない。感動して初めて行動が出てくる。心を揺さぶらないとコトが動かない。本当の行動力も出てこない。特に時代は理性から感性へ、西洋から東洋へ。激動、激変、大動乱の時代。だからこそ、仕事においても我々は安住するのではなくて、仕事に大激動を呼び起こす…それぐらいの気持ちを持って、生きていかねばならない。激しく業態の転換を実現していかなければ、時代の先取りはできない。本当に感動の建築とはなんなのか？本当の感動の仕事とはなんなのか？感じさせて初めて金になる…そういう時代になる。合理性を追求すれば、合理的に計算した金しか入ってこない。感動させて、素晴らしいと感じさせれば、ちょっと言われた金だけでは気がすまないな、もう少し金を弾もうかな、そんな気持ちになってもらう…そんなことは今の時代よくないのかもしれませんが、お客様の方からそうしたくなるような仕事をするということが大切になってくる。心の時代、仕事にも感動が必要な時代。とにかくどう変えていくか、どう変えて世の中に感動を呼び起こすかが、職業上大きな課題です。合理的なものをつくっているだけでは、時代の要請に合わない。あらゆる職業が感動を目標にして仕事をする…そういうことが望まれる。変化が感動を呼び起こす、感動を呼び起こす変化をどう作り出していくか。ここに激動の時代を生きる職業人の課題がある。歴史をつくるためには過去の人間が誰もやってないことをやらないと歴史はつくれない、出てこない。新しいことをやらないと。なぜ、我々は今日まで古代からずっと歴史を積み重ねて、時代を変えて、素晴らしい文明社会築いてこられたのか。いつの時代も時代に生きる大人たちは若い者をバカにして「今の若い者は」と自分たちの価値観と違うことを言って、勝手なことをする若者を非難しますが、だけども、大人たちから非難されていた若者が20～30年したらまだ見ぬ未来をつくりだしてしまうんです。それが歴史です。なぜ、大人たちからバカにされていた若者たちが20～30年経ったら、大人たちがまだ見ぬ未来を描き出して、作り出してしまうのか。ここにはどんな原理が働いているのか。それは、子どもは親から生まれてくるんですが、子どもは生まれながらに親を超えて生まれてくるんです。子どもは両親から遺伝子を持って生まれてくる…つまり、過去の人間のふたり分の可能性を一身に背負って生まれてくる。それが命の誕生の原理。新しい命は過去の人間（命）ふたり分の遺伝子をもらって生まれてくる。つまり、子は親を超えて生まれてくるんです。だけども、遺伝子をふたり分もらって生まれてくるだけでは、新しい時代はつくれない。なぜなら、遺伝子は過去のもの。過去のものをいくらもらっても新しいものはつくれません。では、なぜ、新しい時代をつくれるかというと。子どもの命は有機体、有機体とは、両親からもらって遺伝子が自分の中で、有機的に絡み合って湧いてくる力がそこのこの力。相乗効果として生まれてくるものだから、まったく過去になかった新しいものが、実はその子どもの本当の力。次々とそういう構造で子どもは生まれてくるのだから、確実に親がまだ見ぬ未来をつくっていく…ということになります。命は有機体であって相乗効果を作り出す、働きをしていることにより、実現されるのが歴史なんだと。なんで子は親ができなかったことをやってしまうのか、それは両親からもらった遺伝子が相乗効果を経て、子どもの中で作用して、そして子どもの力が湧いてくる…だから、父の力でもなく、母の力でもなく、まして足し算とも異なる…それらを超えたものが生まれてくる。生命の歴史とはそういう歴史である。

これが、我々が歴史をつくるために生まれてきたんだという根拠になります。また歴史をつくらなければ、自分が親から生まれてきて次の時代を託されたという親の願いを子として実現することができない。そういう意味で人間は第二番目の目的として歴史をつくるために生まれてきたんだと、新しい時代を呼び起こすために生まれてきたんだ、だから我々は今の自分がやっている仕事において歴史をつくらねばならない、今我々がやっている仕事において新しい時代をつくらねばならない、今やっている仕事に過去になかったものを積み重ねていかなければならない。それが仕事をすることの意味であって、その結果とし業態の転換を図り、仕事に命を与えて、仕事の歴史をつくっていく。我々がただ単に無自覚的に歴史をつくることを意識しないで流れ作業的に仕事をしているのであれば、残念ながら仕事を殺しているんだと、仕事から命を奪っているんだと。必然的にその会社は、時代に取り残されて、やがては衰退し、滅びる運命にある。とにかく会社は生き続けていくためには、日々変化を作り出さなければならない。しかもより良い変化を全員がやらなければ、成長の活力が生まれてこない。一人ひとりが自分の持ち場において、模索的な仕事に対する意欲・情熱が会社をいつの間にか会社を成長させている。そこに結びついていく。決して大きなことをしなければならないわけではない。忘れてはならないのは、毎日毎日生きていくためには変化をしなければならない。変化がないと死んでいるのと同じだから。ちょっとしたジムの仕方にも、こうした方が能率が良い、楽しいなど、一人ひとりが考えて、その持ち場において、仕事を成長させている、変化させている…それが大事なんですよね。

我々は歴史をつくるために生まれてきた、新しい時代を呼び起こすために生まれてきたんだ。仕事よりももっと広い範囲で社会を考えてみたら、社会には様々な問題がある。今はイスラム国のことで世界中が揺れている。原発の事故の問題もある。高齢化社会も、少子化の問題もある。考えてみたら嫌というほどの問題がある。尖閣諸島や領土の問題もある。なぜ、歴史には問題が絶えないのか。いつの時代も問題があるのか。なぜなら、問題がなければ歴史はつくれない。問題がなかったら時代は動かない。問題も悩みもないのであれば、何もしなくてOKとなる。問題も悩みもあるから、このままでは放っておけないから、歴史を動かす力になっていく訳ですね。歴史をつくる原理は、今ある問題を解決し、今ある欲求を実現することによって未来がつくられていく。未来・歴史というのは今ある問題を解決し、今ある欲求を実現することによってつくられていく。

先見力、未来を見る目を養おうとするなら、現実にはどんな問題、欲求があるのかを知る・掴んだら、その人は確実に何十年、何百年先を見られる人間になれる。これが先見力を養うための基本原理ですね。今あるもの中にどういう問題があるのか、潜んでいるのか。この潜んでいる問題まで発見できたら、何百年先も見えてくる。飛行機なんかでも鳥が飛ぶのを見て、自分も飛んでみたいなというところからきています。欲求が出てこないと、何事も現れていない。存在するものを支えているのは、欲求なんです。欲求がなくなっては存在するものが消えてしまう。欲求が出てこれば存在が現れてくる。存在の存在性を支えているのは欲求だ。今商店に並んでいる商品も欲求されなくなれば、棚から消えてしまう。なくなってしまう。今ないものでも欲求されれば、それがつくられ始めて商店の棚に並ぶようになる。存在を支えているのは、欲求である。会社でも求められる人間になることが一番大事。求められない、お前はもういらんと言われたら一巻の終わり。求められる人間になる必要がある。

しかも問題というのは、未来をつくるために出てくるわけではなく、もっと身近に言えば、命に潜在する能力を引き出すために出てくる。問題というのは、自分を成長するため、社会を発展するため、会社を発展するため、時代を良くするために出てくる。犯罪や事故というのはあったらいかん、無い方が望ましいと思われていますが、犯罪も事故もない世の中というのは、停滞する。犯罪や事故というのは新しい時代をつくるために出てくる現象なんですよ。犯罪や事故すら、歴史をつくるためには必然的な現象なんですね。昔は石川五右衛門先生がおっしゃいましたが、「浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」と。海岸の砂が全部消えたとしても、泥棒はなくならないと。泥棒がなくなってしまっては、社会が良くなる道も見えてこない。悪いやつ、悪いことが起こるから、起こらないようにしようとする…あってはならない犯罪すらも社会を動かす、社会の問題点を気付かせる、良くする、変化をつくりだすための、必然的な現象である。歴史がある限り、犯罪や事故はなくなることはない、必ず起こる。だから我々は犯罪や事故を責めるだけではなく、なぜ起こったのか、その原因を突き止めて、時代を良い方向に動かしていかねばならない。我々は犯罪者を責めるだけでは半分、犯罪者からも学んで、犯罪者の声にも耳を傾けて、もう二度と起こらないようにどうしたら良いのかを共に考えていく…そういう社会をつくっていかないと不完全な人間が、誰もがそれなりの役割を果たして死んでいくといことにならない。犯罪者すら役割がある。自分がこういう犯罪を犯すことになったのはなぜなのか？当事者も周りの人も共に考えて、二度と悲しい犯罪が起こらないようにみんなで考える。そうすることで家庭も会社も社会も良くなり、成長していく。犯罪を罰するだけではことの半分。犯罪すら活かしていかないといけない。人間が不完全である存在である限り、永遠に逃れることのできない宿命である。避けがたいもの。いろんな問題を個々人が抱えていますけど、それは不幸ではない。問題こそ希望だ。悩み、問題を抱えるから諦めなければ、成長できる。押し潰されなければ成長できる。悩み、問題は嫌なことだけど、俺の潜在能力を引き出すため、成長させるために出てきてくれているんだと解釈して、悩み、問題に負けないでたくましく生きていく、これが人生の生き方の基本である。生きるとは、問題を乗り越え続けること。理性的な人間は問題を出てこないようにする、道を探し続ける。問題が出てきてしまったと、間違えてしまったと、問題から逃げてしまう。これは弱い人間の生き方。問題や悩みを乗り越えられない人間は、人間性が弱い。強い生命力で生きていこうとしたら、問題を乗り越えなければならない。問題悩みを乗り越えることによって、今自分が持っている力よりももっとすごい力が命から湧いてくる。これが潜在能力を持っている権限だ。問題にぶつかることによって知恵、気付きが湧いてくる。それによって人間は成長できる。悩みや問題がない人生は怠け者の人生。それを望むのは、事なかれ主義。これこそまさに楽がしたいだけの人生を望むこと。易きに流れる、弱者の人生だ。そこには成長はない、あるのは衰退だけ。不平不満を言いながら生きて死んでいくしかない。本当に幸せだなと感じ、成功を手に入れるには、どうしても問題を乗り越え続ける強い意思が人生には求められる。問題を乗り越え続けないと人生に成功はない。問題がでてきたときに不平不満を言っていたのでは、嫌な人間性になってしまうし、結局は成長できない。どんどん経済的にも衰退し、人に嫌われるような人間になってしまう。人に責任転嫁してしまう。どんな問題でも俺に任せておけ、俺がなんとかする心配するなと言われたらこの人に付いていこうと思いますよね。悩み、問題は自分を成長するために出てくる。自分の潜在能力を引き出すために出てきてくれるものだ。なぜなら、今の自分の持っている力でなんともならんことが、本当の問題。今の自分の力でなんとかなるものは問題ではない。では問題が出てくる理由は、潜在する力を引き出すために出てこないといけないから。命はそういう構造になっている。なんともならんという状況にぶつからないと、潜在するものはでてこない。しかも、人間の今の能力を考えると、持って生まれた能力の約1割弱しか使っていない。母なる宇宙から生まれながらに与えられた力のあと9割以上も命に潜在したまま残っているんです。ということはまだまだ人間の可能性は、潜在する9割の能力が出てきて歴史は終わるわけですから、まだまだありますよね。人間が文明を作り始めて3000～5000年、もっと古い時代からあると考えれば、約1万年と想定するとあと9万年もあるわけです。まだまだ潜在能力を出して、目の前にある問題をどんどん乗り越えていかないと、人類史はおわらない訳ですね。だからこそ、我々はそんなに簡単に問題を忘れるような人間になってはいけない。問題こそ希望だ、夢だという思いを持って、生きていかないと強くは生きられない。問題を恐れたら、臆病な人間になってしまう。だけど、多くの人は問題が出てこないことを望む。悩みがないことを望む、これは理性的に生きてしまっているから。自分は理性的ではないと思っているかもしれませんが、教育の結果、みんな理性が感性よりも成長してしまっている。感性は問題を感じる力、理性は答えを出す力。答えを出す力=理性ばかりが成長してしまうから、答えが出てこない問題を嫌がる。問題が出てくると嫌だなと思ってしまう。問題が出てくると理性は間違えてしまったと考えてしまう。これは逃げの人生になってしまう。問題は自分を成長させるために出てくる、問題は潜在能力を引き出すために出てくる。しかしも人間は不完全だ。不完全なのだから、何事でも完全はない、絶対はない。不完全だから欠けたものがある。どんなことをしても人間の人生には問題は出てくる。問題のない現実などありえないのが、不完全なる人間の現実だ。

問題がないと思ったら、それは問題があるのに見えてないということ。問題があるのに見えてないほど恐ろしいことはない、危険なことはない。よく点検なんかしても問題を見過ごしてしまって、それをほったらかしにしてしまって、大事故が起こるわけですから。問題がないと思うほど危険なことはないですよ。不完全な人間のすることなのだから、問題がないわけはない、ちゃんと調べたらちゃんと問題がある。そういう気持ちで点検しないといけない。ついつい話しながら作業をしてしまって、不完全な点検になり、問題を見過ごしてしまう。それによって大事故、大崩落事故が起きてしまう。例によって上に立つ責任者は「問題はありませんでした」という報告を望んでしまう。問題があることを嫌う。だから、上に立つ人間が、問題があることを嫌えば、部下は問題があることを隠す。これが隠蔽体質というものを会社につくってしまう。病院も学校もあらゆる組織が隠蔽体質になってしまっている。経営者が問題を嫌えば、社員は問題を隠す。異常なしという報告を望む、異常があればややこしことになってしまう…。当面、大したことがなければ良いでしょうと、異常なしで報告をあげてしまう。それによって小さい問題が取り残されてしまって、大事故につながる。だから、人間のすることには問題がないことなどない。ちゃんと調べたら必ず問題は出てくる。問題ありませんでした。異常なしという報告をあげてきたら疑うべき。どこかに異常がないとおかしい、問題があって当然という見識がないと、大きな事故は防げませんよ。不完全な人間社会においては、問題があることが正常、問題がないことは異常なんです。建築でもそう。どこかに問題がある。問題ありませんでしたではおかしい。もっとよく調べてこいと言わないと、大きなクレームに結びつくことになる。全然問題のない建築はない、問題を見付け出したら、きみはえらいと褒めるべき。問題ありませんでしたという者には、注意をすべき。本当の点検というのは、問題がありましたが、対処・処理しましたというもの。上っ面だけで異常なしで、一件落着では何も意味がない。建築の場合、住んでいって床がたるんできて、ボールを置いたら転がっていってしまうやふすまが詰まってきたなど、いろんな問題があって当然。それもちゃんと施工責任者が修理をしないといけない。基本的には、異常なしという報告はありえない。点検をしたら、問題は発見されなければならない。その問題点を補修してはじめて、安心してやっていける…それが現実なんだと。それを肝に銘じて欲しい。それがわかっていないととんでもない大事故に繋がり、会社の命運を左右するようなことになってしまいかねない。問題があることは健全、問題がないことは異常だと。問題があって当然、問題がないことはおかしい。これは職業上、誠実な仕事の仕方を貫いていくならば、重要な課題であります。

決して問題がないことを幸せに思ってはならない。悩みや問題がないことは逆に不幸である。なぜならそれは気付くべき点に気付いていないから。家庭でもそう。奥さんがいろんな問題を抱えているのに、ご主人がわかっていない、わかってあげようとしないことが不幸。どんな問題があるかをご主人が知ってあげて、そうか、早くわかってあげられなくてごめんねと、その瞬間に奥さんは幸せになれる。知ってあげるだけで救いになる。問題があるのに知ろうとしてくれないのが、一番の不幸。どんな問題でも、ではその問題を俺が解決してあげようというのは、手を出しすぎ。問題というのは、知ってあげて、わかってあげるだけで充分。解決するのは本人でないといけない。本人の生きる力にならない。助けてあげようと問題を解決しようとしてあげるのは、立ち入りすぐ。お節介。問題は、本人に解決させないといけない。アドバイスや協力はある程度必要ですが、とにかく解決は本人で、問題を乗り越えたのは本人というのが大切。やるべきは、知ってあげることと、わかってあげること。社長さんなら社員の悩みや問題を知ってあげて、わかってあげることが大切。すべての社員はいろんな悩み、問題を抱えている。もちろん、社長も同様。社員も社長の悩みや問題を抱えているので、社員から知ってあげてわかってあげることも大切になる。とにかく、みんな悩みや問題を抱えているということをわかるべき。そして、知ってあげるだけでも充分。ただ、解決するのは本人。節度を間違えると、善人根性と言って、良いことをしたと思ってるけど、実はその人から生きる力を奪ってしまっていることも充分にありえますので、関わり方というものに気を付けないといけない。

人生は問題が出てこないことを願ってはいけない。問題が出てくることを恐れてはいけない。問題の前でたじろいではいけない。問題から逃げてはいけない。問題は自分を成長するために出てくる、問題は会社を発展するために出てくる、問題は社会を良くするために出てくる。問題をなくそうとするのではなく、問題から学ぶという姿勢が大事だ。そして、問題を活かしていくことが大事だ。あらゆる事柄にはマイナス面とプラス面がある。すべての現象は、おれにとって、我社にとって良かったと言えると、その人物、その会社は成長・発展する。これはマズイ、マイナスだと思ったら、現状は必ず悪い方向へ動いてしまう。人生は解釈ひとつで決まってしまう。どう解釈するか、どう理解するかで決まってしまう。どんな問題でも自分が決断して、歩み始めた道から出てきたものは逃げてはいけない。全部自分を成長するために出てきてくれている、関わってくれているものである。どんな問題でも俺が選んだ道から出てきている、俺に任せておけ、と言って進んでいかないといけないのが人生だ。そのようにして我々は成長、発展の歴史をつくるという生き方が実現するんですね。

自分の選んだ道、決めた道から出てくる問題を避けて通る、逃げるというのは、自分の決断に対する裏切りである。生き方として卑怯だ。

生き方の問題だけではなく、現実に社会にはいろいろな問題がある。社会にはいろいろな問題があるということはどのようなことかというと、誰かこの問題を解決するやつはおらんか、というと問題がまた出てくるんですね。問題が解決されることによって次の新しい時代が始まるんですね。今、我々の社会の中にある乗り越えがたい問題、解決できない問題は、次の時代を生きる力を命の中から引っ張り出すためにあるんです。今の我々ではどうにもならない、この問題は解決できない、この問題は逃げようとなったら、人間が前進する、歴史をつくることを諦めていることになってしまう。問題は潜在能力を引き出すために出てくる。問題はあらゆるものを成長するために出てくる。だから、原発の問題でも今のほとんどの人が、核エネルギーというのは人間が支配できないエネルギーであると捉えている。これは原発をなくそうと考えてしまうのが、大勢の意見です。これは問題を恐れる、理性ゆえの弱気の対応なんですよね。原理から言うならば、我々は原子力エネルギーを恐れてはいけない。もし我々が原子力エネルギー、核廃棄物、放射能を恐ろしい、逃げることになれば、せっかくアインシュタインが核エネルギーを発見したのに、その努力を無にすることになる。

原発廃絶は、アインシュタインを殺す行為だ、我々はアインシュタインの素晴らしい発見と能力をこれからの人類の発展に活かしていかねばならない。逃げてはならない。どうすべきかと言うと、これからやらないといけないのは、核エネルギーから逃げるのではなく、核エネルギーが事故を起こして放射能・核廃棄物の問題が出てきたときに、どう処理するか。すなわち放射能の逃れ方、放射能の有効利用を研究する。そのことによって、核爆発が起こっても、放射能廃棄物が出てきても、こうすれば安全だという科学をつくっていって、人類が原子力エネルギーを支配していくんだと。そんな時代をつくりあげていくために、原発の問題が起こっているんだと理解しないといけない。問題が起こったら避けないといけない、これは理性の判断。問題が起こったら間違い、これも理性の判断。いっとき、自然主義者が科学は自然を破壊すると。だから、科学技術をやめるべきだと発していましたが、理性的で浅はかな科学者の声でした。科学技術は環境を破壊すると。あれほど理性的な人間が問題から逃げることはありません。問題が出てきたら乗り越えないといけないと考えるのが、感性の考え方。感性は問題を感じる力。なぜ感じるか、感性が問題を感じないと理性能力が成長しないからだ。感性が問題を感じないとあらゆるものが良くならない。感性は時代を成長させる力、時代を変える力。理性は完全性を求める力。問題があってはいけないと考える。だから理性は真理はひとつと考える。矛盾を排除する。確率を追求する。違う考えは認めない=考えを統一する。個性がなくなる。間違ってはいけないのは、原発の事故の問題に逃げるのか、挑むのか。逃げたら、まさに人類の敗北だ。アインシュタインを殺すことになる。アインシュタインが核エネルギーを発見したのも、潜在能力によって発見した。この潜在能力も母なる宇宙から生まれながらに与えられている能力ですよ。お母さんが子どもを不幸にするわけがない。母からしたら、やがて核エネルギーを発見するであろう。やがて人類は原発をつくるであろう。水爆、原子爆弾をつくるであろうと、いろんなことすべて潜在能力が出てきてすることですから。母なる宇宙からしたら全部わかっていること。人類は予定の道を歩んで今日まで至ったと言ってもいい。そして、今、核の問題が出てきて、この問題を乗り越える努力をすれば、今に無い新しい能力が命から湧いてきて、潜在能力が出てきて、問題を乗り越えて、人類が核エネルギーを支配する時代が来るよと。それがこれまでの人類史を考えた場合でもやってきた人類の歩み方なんですよ。だから、今、緊急に求める必要のある研究は、放射能の無害化、放射能の有効利用の研究、原発・廃棄物の事故が起こっても恐れない人類をつくっていく、これがこれからの課題ですよ。薬でも副作用が出たらこうしたら良いとわかってからでないと、その薬を安全に使えないですよ。どんな薬でもある程度、副作用はあります。その副作用が大きく出てきた場合でもこうしたらOKとわかっていないと使える薬にはならない。原発でも同様。解決方法を編み出してから使わないといけない。その研究を早急にしないといけない。核エネルギーと聞くと人工的なエネルギーと思われがちですが、太陽は毎日毎日核爆発を行っています。つまりは、核エネルギーは自然エネルギーなんです。太陽光、風力、潮流、地熱と同じ自然エネルギー、無公害エネルギーなんです。本来、宇宙にあるものですから。だから、ちゃんと使っていったら、我々はそれを有効利用して乗り越えていける。どんなものでもプラス面、マイナス面がある。放射能にもプラス面がある。良く使うとすごい効力を発揮することができる。とにかく、問題を恐れてはいけない。問題を乗り越える努力をすることが歴史をつくることになる。それは限界に挑戦すること。不可能を可能にすること=歴史をつくるという行動になる。仕事においても不可能に可能にすることという仕事の仕方をせんと、バーナード（？）ね。限界への挑戦が仕事なんだ、それが会社を発展させる。問題を恐れてはいけない。我々は歴史をつくるために生まれてきたんだ。新しい時代を呼び起こせなければ、自分がこの世に生まれてきた責任を果たせない。ぜひ、そのことをよく考えてみて、我々は自己実現の人生を生きるために生まれてきた、歴史をつくるために、新しい時代を呼び起こすために、つくっていくために生まれてきたんだと。そのことを思いながら、仕事をしてもらいたいし、自分の生き方をよく考えてみてもらいたいと思っています。

今日は今年の年頭にあたって、人生全体に関わる基本問題を話させていただきました。人生の目的とは何か、よく考えてみてもらいたいと思いました。